

## スピノーザに於ける

## アントロポロギーの要求

一

實

許しうべくば、人間の凡ゆる念願は次の三つの根本様式に歸着せしめられうるであらうとスピノーザは謂ふ。即ち事物をその第一の原因から理解し、激情を抑制して道德的なる意嚮を獲得すること、最後に確實に健全に生を活きること。<sup>①</sup>

スピノーザの全思想を貫き流れるものは實踐的態度である。それは革たなる生活の仕方を打ち立てることであり、これは人間的完全性を獲得することに外ならぬ。吾々の一切の行爲並びに思想は最高の人間的完全性の到達へと向けられねばならぬ。<sup>②</sup> スピノーザは彼の體系の端初に於て「私は幸福たらんが爲に何をなすべきや」と問ひ「エテイカ」の最後の定理は之に答へる「幸福は徳の報酬ではなく徳それ自體である」。スピノーザの最後の言葉は思辨でも神祕でもない。スピノーザは「バロツクの悲劇」を超脱する。彼の最後は平和であり満足であり、自我の肯定として逃避に非ず

して現實的生の積極的承認であり、此岸の價值附けである。' Gute Handeln und Froh Sein' はスピノチスムスの箴言でなければならぬ。併し「何處にも存在せぬ人間性を凡ゆる調子を以て賞讃し、之に反して現實に存在する人間性を凡ゆる言葉で以て貶下する」が如きは人間を理解する方途でない。「希望に依てかくあるべきやうに」ではなく「實際にあるがまゝに」理解せられねばならぬ。かゝる理解は併し先づ神の問題より始められねばならぬ。何となれば人間は神の様相に外ならぬのであり、「吾々は如何なるものゝ存在についても、絶對に無限であり完全なる本質、即ち神の存在程確實であることはできぬ」(Eth. I, I. II. Ann.)から。人は常に事物をその第一の原因から理解することを力めねばならぬ。だが第一原因の客觀的相當認識は一の方法論的探求原理を要求する。スピノーザは「知性改造論」(300)に於て、我々にとつて必要な認識の種類の検討を終へた後認識せらるべきものをかゝる種類の認識に依て認識する道即ち方法が講せられねばならぬと述べ、この際人は無限に續く探求原理のあり得ないことを注意すべきであると謂ふ。即ち眞理探求の最上の方法を見出す爲にはその探求の方法を探索する他の方法が必要ではなく、又第二の方法を探索する爲に更に第三の方法が必要ではなく、若し、かくして無限に必要であるとすれば人は

決して真理の認識に到達しないのみか凡そ如何なる認識にも達し得ないであらう。スピノーザに據れば確實性とは客觀的有 (*essentia objectiva*) 以外の何物でもない。即ち形相的有 (*essentia formalis*) を如何に感受するかの様式が確實性そのものである。従て真理なることが確實になる爲には眞の觀念をもつこと以外に何等の他の標幟をも必要としないであらう。真理は常に真理それ自らと虚偽との規範である。真理そのもの或は事物の客觀的有或は事物の觀念——これ等は凡て同一事を意味する——が正當な秩序に於て求められる爲の道こそ、かくして眞の方法であると云ふことが出来る。それ故方法は必然的に推理の手續 (*ratiocinatio*) や認識能力 (*intellectio*) に就て語られねばならぬ。かくしてスピノーザは結論する。「このことから方法とは反省的認識 (*cognitio reflexiva*) 或は觀念の觀念 (*idea ideae*) 以外の何物でもない」と云ふことが明白である。而して豫め觀念がなくては觀念の觀念がないから、豫め觀念がなくては方法はあり得ない。かくして正しい方法とは與へられた眞の觀念の規範に従て精神が如何に導かるべきかを示す方法である。更に又二つの觀念の間に存する關係はそれ等の觀念の形相的有の間に存する關係と同一であるから、これから最完全な本質の觀念の反省的認識が他の諸觀念の反省的認識より優れてゐると云

ふことが従て來る。即ち最完全な方法は與へられた最完全な本質の觀念の規範に從て如何に精神が導かるべきかを示す方法である」(238)。スピノーザの方法は、かくして「精神に於ける探求」となり、自ら發出論的傾向を含蓄すると云はれるのも故なきことではない。人はかくして、最初に一擧にして無限なるものゝ深淵に於て立つ。「神とは絶對に無限なる本質即ち各々永遠無限の實在を表示せる無限に多くの屬性よりなれる本體である」(Eh. I, Def. 6)。換言すれば神は實在を表示して如何なる否定をも包含しない總てのものを歸屬せしめ、自己原因 (causa sui) としてそれ自身の中にあり且それ自身に依て理解せられるもの、即ちその概念が形成せられる爲に他の事物の概念を必要とせぬものに外ならぬ。かゝる神は萬有の内在的原因として存し、存在するものゝ一切は神の中にあり且神なくばあり又考へられることを得ないのである。神はまた單にその性質の法則に則つて働くものであり、従てかゝる神的性質の必然から無限に多くのものが無限に多くの仕方にて起らねばならぬであらう。これに依て神は無限なる知性の對象たりうる總てのものゝ能動的原因 (bewirkende Ursache) であり、又偶然に依ての原因ではなくして自身に依ての原因 (Ursache durch sich) であり、最後に絶對に第一の原因 (unbedingte erste U.) であらねばならぬ。神

は一にして全であり、世界は神の中にあり、世界は神と一致する。かくの如くしてスピノーザのバンテイスムスは理論的には無世界論たり、實踐的には靜寂主義たることを免れ得ぬであらう。遮莫、神性への白熱せる衝動の中に偶然的自我の存在や權利、世界の意味をも没し去る時スピノーザは、'Gottunkenen Spinoza'なる評語を拒むべき何等の理由をも持たぬ。茲に疑ひもなくスピノーザ哲學の華嚴にして浪漫的なる宗教的一大シムフォニーは奏でられうるでもあらう。然しながらかかる絶對にして無限なる神の有限世界に於ける内在は如何にして可能なのであるか。スピノーザに據れば様態とは本體の状態 (Affektionen) であり、神の中にあり、神に由て考へられるもの即ち神に由て「造られたもの」である。従てその本質が存在を包含せぬものに外ならぬ<sup>④</sup>。人間はかかる様態の下に考へられるものであり、神の屬性の變狀或は神の屬性を或る一定の仕方にて表示する。併し有限にして定まつた存在を有する人間は神の屬性の絶對的性質から生ずることが出來ぬ。それは神或は神の屬性が或る様態に由て變狀したとみられる限り、それから起つたに相違ない。而も永遠無限なる變狀に由て變容してゐる限りではなくて、神或は神の屬性が有限にして定まつた存在を有する變狀に由て變容してゐる限り、それから起り又は存在し且營爲

するやうに決定されたのである。かくして有限なる人間は同様に有限で定まつた持續を有する他の原因から存在し營爲するやうに決定される場合にのみ、存在し且營爲するやうに決定されうるのである。<sup>(14)</sup> 神は又單に人間が存在を始めることの即ち生成の原因なるのみならず、その本質の即ち有の原因でありうる。<sup>(15)</sup> 何となれば神の様態としての人間にはそれ自身としては存在は屬せず従てその本質はそれの存在及び持續の原因であり得ない。之を能くするものはその性質にのみ存在が屬せる神であるからである。併しこの場合に於ても神が無限なる限りではなくして、それが有限なる限りに於て、或は人間の本質を形成するものなる限りに於てなることは生成の原因なる場合に於けると同斷である。<sup>(16)</sup> かくして個體的人間存在は神的因果の必然の結果に外ならぬのであるが、然しながらそこに一の抜くべからざる困難が常に隠されてゐることが注意せられねばならぬ。即ち“Deus quatenus”に於てスピノーザは疑ひもなく“petitio principii”の謬穿に陥る。これ永遠無限なる神の内在の思想を覆すものに外ならぬであらう。併しこの困難の前にも、人はスピノーザの屢々警告するが如く徒に遲疑すべきではなく、徐ろに彼と共に猶先へ進まねばならぬ。

- (一) Theologisch-politische Traktat: Kap. 3.
- (二) Abhandlung über die Eimierung des Verstandes: § 16.
- (三) Ethik: I. Lehrsatz 15; 16, Folgsatz 1, 2, 3, 17; 18.
- (四) Ethik: I. Definition 5; Lehrsatz 24. Robinson: Kommentar, S. 74.
- (五) Ethik: I. Lehrsatz 25, Folgsatz; 28; 28, Beweis.
- (六) Ethik: I. Lehrsatz 24, Folgsatz.
- (七) Ethik: II. Lehrsatz 11, Beweis; 11, Folgsatz. Robinson: Kommentar, S. 208.

## 二

感情の問題が一般にアントロポロギイに於て占むべき樞要なる位置について今贅言する必要はないであらう。感情はそれ自身常に人間學である。スピノーザに於てもそれは單なる心理學の課題や科學的興味の關心事ではない。感情論は「エライカ」の序言であり結語である。そこでは人間の力學的なる理解は深められ、生ける人間が餘蘊なく自己の無力なる姿を曝露すると同時にそれよりの昂揚の道が指示せられる。スピノーザに據れば感情とは身體の活動力を増加し或は減少し、促進し或は制遏する身體の感觸 (Affektionen) 及びそれと同時にこれ等の感觸の觀念に外ならぬ。かゝる定義の中に、既に人はスピノーザの感情論の生理學的背景を力説するポロツクに同意しなければならぬ理由を見出すであらう。スピノーザが襲ひ來る無數の誤謬より避け得たのはこの生理學的一面を常に看過しなかつたが爲で

あると云ふポロツクの語は眞理であり、ヨハネス、ミューラアの權威がこゝに援引されてもいゝであらう。感情は呪咀し嘲笑せらるべきではない。それは理解せられぬばならぬ。感情は自然の個物の如く自然の必然と可能とから起る。従てその認識は自然の一般的法則に依ての認識でなければならぬ。かくして儔罕なる鋭扉を以て感情の世界は展開せられる。物自身の現實的本質とは各々のものがその有(Sein)に固執せんとするところの努力(conatus, Streben)であり、之は凡ゆる段階に於ける理性的並に受動的生活の基礎をなすものに外ならぬ。然しながらかゝる努力はポロツクの力説する通り決して神祕的なるもの、無意識的なるものではなく、云はゞ力(Force)であり物理的潜勢(physical inertia)に外ならぬ。かゝる努力の同時に精神及び身體に關係するものが欲求(Trieb)である。欲望(Begierde)とは意識を伴へる欲求であり、人間の本質がその興へられたる感觸に依て或ることを爲すやうに決定せられるものとして考へられる限り、人間の本質自身である。人が一層小なる完全から一層大なる完全に至る移行は快(Just)であり、その反對は不快(Unjust)である。欲望、快、不快のこの三者は根本感情と呼ばれ、總ての他の感情はこれから導出せられ結合せられる。感情は若し吾々がそれの妥當なる原因でありうるときは即ちその

結果が吾々のみに依て明晰判明に知覺せられる場合には能動と解せられ、然らざる場合には受動と解せられる。即ち受動的感情は外物への依存に於てあり、表象を構成する諸々の事物の非妥當なる觀念と共に變化する心情の動搖である。それ故に受動なる感情の起原は表象と根本感情との關係に於て觀察せられ、法則の秩序の中に於て探察せられねばならぬ。<sup>(4)</sup> 表象の第一法則 (Imagination as Conservative) に依れば、自性維持の努力の最も單純なる形は外物に依て吾々に與へられた快なる像を維持し、不快なる像を消滅せんとする努力である。<sup>(5)</sup> 前者は精神及び身體の力の昂揚であり、後者は低下である。愛と憎とはこの傾向に屬し、これより貪食、貪飲、無節制が起り、高慢、卑屈、過褒、過貶、名譽、恥辱、殘忍が導かれる。愛はスピノーザに據れば、二つの生ける人格の直接的交易の中に醸し出さるゝ精神的、不可測的なるものゝ如きではない。それは常に外部の原因の觀念を伴へる快であり、憎は外部の原因の觀念を伴へる不快に外ならぬ。それ故に愛と憎とは精神と同時に身體に關係する快樂 (Vollust)、苦痛 (Schmerz) として過度になりうるであらう。愛と憎とはそれ自身の中に含まるゝ快、不快の量に從て數學的確實性を以て限定されて理解せられねばならぬ。貪食、貪飲、無節制は過度の飲食及び性交に對する愛又は欲望に外ならず、自己を正當以上に

評價することより生ずる快は高慢であり、不快から正當以下に自己を評價するとき人は卑屈となる。之に對し、自己ではなく他人を正當以上に評價することより生ずる快は過褒であり、その反對は過貶であらう。外的原因ではなく、内的原因の觀念を伴へる快、不快は名譽、恥辱と呼ばれるものであり、若し、人が自分の憎むものから愛されるとき、同時に愛と憎とに壓迫せられねばならず、而してこの際憎惡が勝るならば彼は自分を愛する人に尙ほ危害を加へようとするであらう。この感情は正に殘忍と呼ばれるに價するであらう。況や、愛する人が憎に對する普通の機縁を與へなかつたと信せられる際に於ては。表象の第二法則 (Imag. as Sympathetic) は謂ふ「若し、それに對して吾々が猶如何なる感情をも有したことのないところの、吾々に類似したものが、或る感情に移されたことを表象するならば、吾々は既にそのことに依て、類似した感情に移される。」<sup>(2)</sup> この原理の下に憐情、野心、同情、嫉妬、慈悲、自愛、卑下、競争、後悔が數へられる。憐情は他人の不幸から生ずる不快と定義せられることができる。それ故に憐情はそれ自身では惡であり且無用である。野心は他人の氣に入らんとするための理由のみから、或る事を爲し又は中止せんとする努力であり、それ故に自己の愛し又は憎むものを總ての他人も亦讚美し、排斥するやうになさんとする努力も實

は野心に外ならぬであらう。他人の幸福を喜び、不幸を悲むやうに愛に由て動かされる感情は同情であり、その反對は嫉妬である。同情から人に親切をなさうとする欲望は慈悲であり、自己自身の省察より生ずる快は自愛と呼ばれ、自己の短所の觀念を伴へる不快は又卑下と呼ばれる。競争は欲望に就て起る感情の模倣であり、後悔 (Repentance) は自己が他人の苦痛の原因であることに於て感ずる不快である。表象の第三法則 (Imag. as Subject to Association of Ideas) に依れば、精神が一度同時に二つの感情に移されて後にその中の一に移される場合には、又他のものにも移されるであらう。<sup>⑩</sup> 貪欲、好愛、嫌惡、思慕、猜忌、好意、憤怒、尊敬、戰慄、敬慕、輕蔑はこの原理に屬する。貪欲は金錢に對する過度の欲望であると解せられ、好愛は偶然に由て快の原因であるものゝ觀念を伴へる快であり、その反對は嫌惡である。ものを占有せんとする欲望は思慕であり、それは又愛するものゝ不在に關係する不快に外ならぬ。愛するものに對する嫉妬と結合せる憎惡は猜忌であり、好意は他人に善をなしたものに對する愛であり、憤怒はその反對である。若し吾々が、或る人がその聰明、勤勉又はかゝる種類のものに於て、遙に吾々を凌駕せることに對して驚くならば、かゝる驚嘆は尊敬と呼ばれる。併し、若し或る人の憤怒、嫉妬等を驚く場合にはそれは戰慄と呼ばれね

ばならぬ。敬慕は驚嘆又は尊敬と結合せる愛であり、輕蔑は驚嘆の反對である。表象の第四法則 (Imag. modified by Time-Association) に依れば「人間は過去或は未來のもの、表象像に依て現在のもの、表象像に依ると同一の快及び不快の感情に移される。」<sup>②</sup> 希望、恐怖、確信、絶望、喜悅、落膽、大膽、小膽、驚愕はこの原理に屬する。希望はその結果に就て疑はれる未來又は過去のもの、表象像から生ずる不確かな快であり、恐怖はそれの反對である。これ等の感情から疑惑が除去せられることに依て希望は確信に轉じ、恐怖は絶望となる。その結果の疑はれた過去のもの、表象像から生ずる快は喜悅であり、この快に反對せる不快は落膽である。大膽は自己と等しい他人がそれに近づくことを恐れる危険に身を曝して、或る事を敢行せんとする欲望であり、その反對は小膽である。驚愕は小膽の一種であると解せられうるであらう。表象の第五法則 (Imag. under Inusory Beliefs) は謂ふ「吾々が自由なるものとして表象するものに對する愛及び憎は、等しい原因の場合には必然のものに對する愛及び憎よりも一層大でなければならぬ。」<sup>③</sup> 怒、復讐、自己満足、悔恨はこの原理に屬する。憎惡するものに危害を加へんとする努力は怒であり、自己に加へられた危害に報いんとする努力は復讐である。原因として自分自身の觀念を伴へる快と不快は自己満足であり、悔

恨 (Remorse) である。この兩感情は、人は本來自分自身を自由であると盲信するが故に甚だ激烈でありうるであらう。

かくの如くにして、人は日用の語で表すを常とせるよりも一層多くの感情を猶導くことができるであらう。何となれば感情の名稱は談話の必要から作られたものに過ぎぬに反して、受動的なる感情の種類は無限であると謂はねばならぬ。蓋し、受動的の性質は對象の性質を表示するやうな仕方では説明されねばならぬからである。激情 (Leidenschaft) と呼ばれ、ここでは人間は恰も、逆風に驅られた瀾濤の如く、自己の終末と運命とを知らずしてこゝかしこに彷徨する「苦惱の世界は、正しくかゝる受動的感情の領域に外ならぬ。かくの如き受動的感情に對し、能動的感情は吾々が働をなす限り、吾々に關係する感情である。即ちそれは認識に伴ふ感情であり、隸屬に對する自由、依存に對する獨立の領域に外ならぬ。之より起る凡ての働は勇 (Soelenstärke) に歸着せしめられる。人が彼の生存を單に理性の命令に從て維持せんと努める欲望は意力 (Willenskraft) であり、義心 (Eidelnut) は人が單に理性の命令に從て彼の同類を援助し、且親交を結ばんとする欲望と解せられる。この兩者は勇の二種類ではなく二側面であり、惡しき感情に對する精神の力を示すものとして最も重要なものでない。

ればならぬ。以上、スピノーザの導くが儘に、受動的感情及び能動的感情を陳述し來つたのであるが、併し、若し茲にスピノーザに於ける感情の單に一義的、平板的なる演繹のみがみられるならば、それは誤である。既に受動的感情と能動的感情との關係が、受動的なる感情は常に一のより以上に結合せられたる能動的感情の中に要素として含まれねばならず、能動的感情はそれ故各要素がその種々の對立せるであらう性格にも拘らず、それに依て統一せられてゐるところの力の中に自己をあらはすものなることに依て示唆するが如く、感情相互の關係は平面的ではなくして立體的であり、複合的である。「愛に依て征服せられた憎は愛に變じ且その際に愛は憎が先行しなかつた場合よりも一層大であらう。」<sup>(17)</sup>「感情はそれと反對し且それよりも一層有力なる他の感情に依てのみ制遏せられ又揚棄せられる。」<sup>(18)</sup>否定せられた感情は保留せられて、より大なる感情への質料となることに依て感情深化の動力となる。スピノーザの引用するさる詩人の次の言葉も、固かくの如く理解せられねばならぬであらう。「Hoffen zugleich und fürchten zugleich muss jeder, der liebt; Eisern ist, wer da liebt, das, was der andere verliert.」<sup>(19)</sup>

感情は自性維持の努力の徴表であり、能動的感情に依る受動的感情の克服は人間

の現實的本質の自己純化の過程に外ならぬ。感情の相違はものゝ本質の相異を示す。かくの如くにして、感情の一般的特質が論せられ來つた今、一應人間存在の本質的性格を吟味して措くのにこゝは適當な場所である。身體性 (Leiblichkeit) は自然に於ける人間の存在規定の原始的理由なると共にそれへの復歸の原理であり、區別化の原理なると共に共同化の原理である。身體性のこの二重性格は物自身の現實的本質としての 'conatus' の二重性格であり、これより又欲求の、欲望の二重性格が従て來る。スピノーザに據れば欲求は經驗的、個人的意識の奥底に潜む普遍妥當的なものゝ如きではなく、具體的、現實的なものとして個別的でなければならぬ。即ち人間はその本質的性質に於て、換言すれば實在性の程度に於て個別的でなければならぬ。併しこのことは人間相互の一致を否定するものではなく、却てこの區別の實在性の上にこそその一致は立言せられうると謂はねばならぬであらう。人若しスピノーザの conatus に於て「唯一者」の利己主義的道德原理の個人性を見出そうとするならば、それは誤でなければならぬ。conatus に於て利己主義と利他主義とは一體をなし、個人性と社會性とは辯證法的統一をなす。これ conatus が單に自性維持の努力たるのみでなく、常に全體の維持宣揚へ向けられたる恒性なることの意味であり、我

と汝との共通的地盤に於て之が把握せられんことの意味に外ならぬ。かくしてスピノーザは謂ふ「吾々の本性と最も多く一致するものは考へられうる限り最も價値あるものである。何となれば、例へば全く性質を同じくする二つの個體が相互に結合するならば、それらは各個體だけよりも二重に強力な一個體を形成する。それ故に人間程人間にとつて有用なものはない。」<sup>(46)</sup>既に感情論に於て義心と友情とが強調せられてゐることが注意せられねばならぬ。自性維持の欲求は社會的共同體に於て最もよく保證せられ、徳の實現は社會生活に於てのみ全うせられる。自然狀態に於ては「自己の権利の下に」*suī juris*あることは「他人の権利の下に」*alterius juris*あることであり、之らは社會生活に於て「共同の権利の下に」*jus commune*立つことに依て始めて現實的となる。スピノーザはスコラ哲學者達が人間を ‘*animal sociale*’ と呼ぶことに對して反對すべき理由をもたぬことを陳べてゐる。<sup>(47)</sup>「人間の國家的共同態に資するもの、或は人間が相互に和合して生活するやうになすものは有用であり、之に反し國家の中に分裂をもたらすものは惡である。」<sup>(48)</sup>それ故に理性に依て導かれる人は社會に於ては常に公正であり、信實であり、人々と共に善を樂まうとする。從て又「理性人は自分自身にのみ服従する孤獨に於てよりも、共同の決定に從て生活するとこ

ろの國家に於ては一層自由である。」<sup>④</sup>スピノーザの賢者は孤獨なる賢者ではない。かくの如くスピノーザの出發點は個人であるにも拘らず、個人主義的立場は直に止揚せられて社會性が強調せられる。個人は自己を他と區別することに依て社會に於ける自己を見出す。孤立遊離せる人間はスピノーザに於ては考へうべくもない。人間の本質は、かくして總體性、個別性、多數性に於て把握せられ、之は又全體人間の三様の在り方を意味するものに外ならぬであらう。

- (一) Pollock: Spinoza, p. 201; 211. Gebhardt: Spinoza, Einleitung.
- (二) Ethik: III. Lehrsatz 7.
- (三) Pollock: Spinoza, p. 202; 203. Martineau: A Study of Spinoza, p. 237.
- (四) Martineau: A Study of Spinoza, p. 242—253.
- (五) Ethik: III. Lehrsatz 12; 13.
- (六) Ethik: III. Lehrsatz 27.
- (七) Ethik: III. Lehrsatz 14.
- (八) Ethik: III. Lehrsatz 18.
- (九) Ethik: III. Lehrsatz 49.
- (十) Ethik: III. Lehrsatz 44.
- (十一) Ethik: IV. Lehrsatz 7.
- (十二) Ethik: III. Lehrsatz 31, Folgesatz.

(十三) Ethik: IV. Lehrsatz 18, Anmerkung.

(十四) Politische Traktat: Kap. 2. §. 15.

(十五) Ethik: IV. Lehrsatz 40.

(十六) Ethik: IV. Lehrsatz 73.

### 三

理性知は轉じて勇となり、直觀知は白熱して神に對する精神の知的愛となる。スピノーザに據れば理性より起る總ての努力は認識以外の如何なるものにも向はず、而も最高認識は神の認識であり、之は精神の最高なる善であり、精神の最高なる徳である。<sup>①</sup>而してかゝる最高なる認識に於て認識せんとする努力が又 *conatus* に外ならぬであらう。*conatus* は神の認識に於て遍ねく自己を開示すると共に自らを完うする。「人間の精神は身體と共に全く破壊せられずして、その中の永遠なるものが殘存する。」<sup>②</sup>精神のこの永遠なる部分は精神の本質であり、それは萬有を永遠の相の下に於て認識する。かゝる最高認識から、ある限り最も高い精神の満足即ち最高の快が生じ、之は原因として神の觀念を伴ふ。神に對する精神の知的愛とはかゝるものであり、之のみ永遠である。知的愛に於て人間は復活し (*wiedergeboren*) 幸福であり、眞に自由であり、願はしき個體の永遠性は確保せられるのである。かくして人はホラア

「イスと共に叫ぶことができる。『non omnis moriar』。然しながら、云ふまでもなくスピノーザに於ける永遠の生は存在の繼續ではなくして、存在の一の在り方であり、完全性に對する來世的報酬ではなくして此岸に於ける完全性そのものである。それ故に永遠の生は不死(Unsterblichkeit)を意味しない。死はスピノーザに據れば、身體の部分間に於ける運動、靜止の比例の攪亂に際して生ずる自然的、物理的現象に外ならず、人は何故に身體が髑髏に變じた場合に始めて死を語らねばならぬ理由があらうか。理性は死を勝利に導き、自由人は死程考へないことはなく、彼の知慧は死に就ては、なく生に就ての省察である。」<sup>(5)</sup>

スピノーザは神に對する精神の知的愛に於て、そこより體系の發出せる出立點へ歸還したと謂はれる。従て又神の概念はスピノーザ哲學の端初に於けるが如くに又最後に立つものであり、直觀から客觀的實在界が導出せられ、その世界の中に於て再びこの直觀に場所が定められたかの如くである。併しこの一見神祕の粉飾を凝らす知的愛の眞實の中にこそ最も深い眞理が隠されてゐる。「感情は唯感情に依てのみ克服せられうる」と云ふスピノーザの卓越せる命題は、知的愛に感情の性格を與へずには措かぬであらう。知的愛は人間の最高の善であり、最高の認識であり、同時

に又一切の感情をば沈黙の中に封じ込む最高の感情である。認識と感情とは茲に於て同一である。<sup>(四)</sup>然しながらスピノーザに據れば凡ての感情は一の狀態の變化 (Zustandsänderung) を前提し、推移 (Übergang) の中に成立する。かくして又知的愛は感情であるべきでない。こゝに疑ひもなく、假令 Seligkeit の概念を以て措き更へやうとも知的愛の含むこの矛盾は避け難いであらう。<sup>(五)</sup>併し、翻つて考へるならばかゝる矛盾こそ却て知的愛の偽らざる面影でなければならず、それは人間的本質の二重性格の必然的意味でなければならぬ。かゝる神に對する精神の知的愛は「神が無限なる限りではなくして、永遠の相の下に觀察せられた人間の精神の本質に依て説明せられる限り、神が自分自身を愛するところの神の愛それ自身である。即ち神に對する精神の知的愛は神が自分自身を愛するところの無限なる愛の一部分である。」<sup>(六)</sup>従て又神は自分自身を愛する限り、人間を愛するが故に神に對する精神の知的愛は人間に對する神の愛と同一でなければならぬ。こゝに人は「神は本來何人をも愛し或は憎むことができぬ」と云ふ命題との明白なる矛盾に逢着するであらう。この避け難い困難の前に、併し人は知的愛の思想を以てスピノーザの體系に於ける 'Aferthought' であり、<sup>(七)</sup>の 'Dogma' に過ぎぬとすることに依て之を中和する必要があるであら

うか。そこには、二つの名に依て呼ばれたる唯一のもの、即ち人間があるのみである。<sup>④</sup>人間愛の或る形式がそこに語られてゐるのみである。こゝでは疑ひもなく神が人間と一致する。感情は單なる主觀的感官の奸計でも奇術でもなく、常に本體論的形而上學の意味をもつべきであることがこゝに見出されるであらう。感情の中にはアントロポロギアの眞理が隠されてゐる。感性的現實世界への衝動として *conatus* が、それに纏綿するかにみえる神祕的、觀念論的皮殻を破碎して自ら自己批判の刃と變じ、天上的靄霞の中より現實的人間本性を奪取して獨自の個別性と特殊性の上に屹立するとき、人は猶中世的知的愛の概念を以てスピノーザを誣ひようとするのであらうか。知的愛に於て、現實的人間本質の自己宣言がみられねばならぬ。

かゝる大膽なる論述は奇異に思はれるかも知れぬ。併しこの出發點とは全く轉倒せる所論こそ、スピノーザの體系の根柢より成長し來つた論理的必然性の果實でなければならぬ。神と人間との關係はかくしてのみ始めて再省せらるべき必然性に迫られるであらう。

私は曩に、絶對有たる神の萬有に於ける内在を説く場合に、*quatenus* の問題を指摘してスピノーザ哲學の含む矛盾の契機を暗示し、之が知的愛の教説に於て明白なる

光の下に持ち來たらされたことをみた。即ちそこには自らなる二つの神の概念が設定せられる。絶対に無限なる神と全體的現實的人間本質に依て説明せられる限りの神と。即ちスピノーザに於ては神は人間との矛盾である。スピノーザの哲學は神の現實化として同時に神の肯定であり、同時に神の廢棄たらざるを得ない。前者に於てスピノーザは無世界論者であり、後者に於ては無神論者の軌を辿らうとする。

この際、かゝる歸結のスピノーザに於ける前提要請の有限的悟性の立場の必至的結論なりとなし、之をヘーゲル哲學への聯關に於て、殊に宗教哲學の體系を以て十全的に理解しようとして試みられるかも知れぬ。そしてそれが導かるべきスピノーザ哲學の方向であり、含蓄するスピノーザ哲學の具體相であるとさへ思はれうるであらう。乍然かゝる試圖のスピノーザ哲學の精神の一の歪曲に終らざるを得ぬことは、例之ヘーゲルに於て精神の外在 (Entäußerung) にすぎぬとして位置附けらるゝ自然が、却てスピノーザ哲學の基礎的出發點たることに想ひ至るも明白であらう。今やスピノーザ哲學に於ける自然概念に目が轉せられねばならぬ。(續)

- (1) Ethik: IV. Lehrsatz 26; 28.
- (11) Ethik: V. Lehrsatz 23.
- (111) Ethik: IV. Lehrsatz 39, Anmerkung; V. Lehrsatz 67.
- (1111) Ethik: III. Lehrsatz 58, IV. 59; 61, V. 7; 20, Anmerkung.
- (11111) Huiding: Spinozas Ethica, S. 138; 139. Pollock: Spinoza, p. 269; 270.
- (111111) Ethik: V. Lehrsatz 36.
- (1111111) Ethik: V. Lehrsatz 17, Folgesatz.
- (11111111) Pollock: Spinoza, p. 264. Ehrhard: Die Philosophie Spinozas im Lichte der Kritik, S. 437; 438. Martineau: A Study of Spinoza, p. 273.